

名詞化における「非顕在的具現」と「顕在的具現」の対立

「形態的有標性の仮説」に基づく日英語比較

西牧和也

1. 導入: 名詞化における日英語の相違

影山 (1999: 107-113) によると、英語と日本語には動詞の名詞化に顕著な相違が見られるという。

- (1) a. She hung the wash on the clothes line. b. 物干し紐に {洗い物/*洗い} を掛けた。

(影山 (1999: 110), 一部修正あり)

英語では、(1a) の *wash* のように、動詞派生の転換名詞が具体物を表すことがある。一方、日本語の対応表現は、(1b) のように、具体名詞「物」が必要になる。日本語では、所謂、動詞連用形が転換名詞とされる場合がある (e.g. 「飲み」 (<「飲む」))。しかし、そのような事例はかなり少数であり、実際に、(1b) のように、「洗う」の連用形「洗い」は、(1a) の *wash* に対応する「洗い物」の意味では名詞として用いることはできない。本稿の目的は、名詞化を巡って、日英語間には、なぜこのような違いが見られるのかを明らかにすることである。この問いに答えて、本稿では、その相違は、具体名詞の具現方法による違いであると主張する。具体的には、具体名詞が、英語では、非顕在的であるのに対して、日本語では顕在的に具現されるという違いである。さらに、形態的有標性の仮説 (三宅 (2017)) のもと、この名詞化に関する相違は、構文的意味とその形態的表示に関する日英語間の一般的な相違を反映する現象として捉えられることを示す。また、競合理論 (Ackema and Neeleman (2004)) に基づき、この仮説が捉えている一般的事実に対して、理論的説明を試みる。

2. 非顕在的 vs. 顕在的: 日英語における具体名詞

英語の転換名詞には、非顕在的な具体名詞が存在するとする分析がある。このような分析に従えば、(1a) の *wash* は [N [v wash] [N THING]] というような構造を持つことになる。この構造では、非顕在的な *THING* により、*wash* は具体物を表すと考えられるのである。一方、日本語では、この *THING* は、「物」という形態素によって顕在的に具現されることになる。この分析は、同様な対立が動詞化においても観察されることから、独立した動機付けを持つ。例えば、*to walk* のような非能格動詞は、対応する名詞から統語的に派生されるとする分析がある。この分析に従えば、*to walk* は、(2a) のような統語構造を持つことになる。

- (2) a. [v [v Ø] [N walk]] b. 散歩する

(2a) の \emptyset は非顕在的な軽動詞である。一方、日本語の対応表現では、(2b) ように、軽動詞「する」が必要になる。つまり、英語では非顕在的な軽動詞が、日本語では「する」によって顕在的に具現されているのである。

3. 形態的有標性の仮説からの一般化

非顕在的か、顕在的か、という対立は、日英語間の表現ペアにおいて広く観察される現象である。三宅 (2017: 68) は、この一般的事実を形態的有標性の仮説として、(3) のように定式化している。

- (3) 構文的意味を表示するために、日本語は形態的に有標であることを強く志向する傾向があるが、英語は形態的に無標であっても構わない傾向が強い。

「構文的意味」とは、三宅の定義によれば、特定の文型と直接対応し、文型内の要素に還元できない意味ということになる。三宅は、英語では、構文的意味を持つ表現が相当数ある一方、日本語では、多くの場合、特定の意味は、それを担う形態が必要になると指摘している。形態的有標性の仮説に従えば、英語の転換名詞が具体物を表す場合、非顕在的な *THING* が、その構文的意味として、具体物という意味を担うと分析することができる。しかし、日本語では、その形態的有標性ゆえに、特定の意味には形態的表示が要求されるので、具体物という意味は、「物」として顕在的に具現されることになるのである。

三宅は、以下のような対応関係を観察して、形態的有標性の仮説を提唱している。

- (4) a. This car sells well. b. この車はよく {売れる/*売る}。 [中間構文]

- (5) a. Your home is very close to the campus. b. 君の家は大学にずいぶん {近いね/*近い}。 [同意要求文]

(三宅 (2017: 69), 一部修正あり)

(4a) の中間構文において、動詞 *to sell* は、中間構文専用の形態素を伴うわけではない。一方、これに対応する (4b) の日本語では、当該の意味は「れ」という形態素によって担われている。また、(5a) の同意要求文に対応する (5b) の日本語では、「ね」という終助詞が必要となる。このように、「非顕在的」対「顕在的」という対

